反福祉論―新時代のセーフティーネットを求めて

黒田実咲

金菱清と大澤史伸の共同執筆である本書では、「制度が支援される対象者を規定し、制度の変化によってその対象者やサービスが変わる」という福祉に対する既存の考え方を取り払い、制度から漏れた人々（社会的弱者）の持つパワーや、それらの人を支援する実践を幅広く捉え直し、福祉の新たな方向性を見出そうとしている。反福祉論というタイトルでありながら、福祉の意義と限界を見極めつつ、福祉を発展させていきたいというスタンスをとっており、反「現状の」福祉とも言い換えることができるのではないか。

著者は、飛行場に住む在日コリアンや災害の被災者（支援される側）、NPO 法人や宗教法人（支援する側）といった様々な人々の事例をフィールドワークなどで調査している。自助・共助でいきいきと過ごす社会的弱者の生き方や、公助に頼らない支援活動に焦点を当てたその調査の結果、社会福祉の法律や制度は、もはや私たちを守るべきものではなくて、ある場合（財政難等から生じるサービス低下など）では私たちの権利を侵害してしまう恐ろしい「怪物」へと変化しうるものだと著者はいう。また、その社会福祉の法律や制度に挑むには、自助・共助で既存の制度で満たされないニーズを満たすための実践活動をして、効果的な公助を引き出すべきという結論を出している。

印象に残るのは「魂のケア」という言葉だ。牧師が夜の散歩活動でホームレスにおにぎりを差し出し、何か困ったことがあったら何でも相談しろという。ホームレスの感じたそのおにぎりの暖かさは、人の暖かさでもあっただろう。公的な支援だけでなく、心を救うことにこそ、自助共助の価値があるのだ。

フィールドワークから得た現場の実情や人々の声など、社会的弱者やその支援者のリアルな問題点がよく伝わるのが前半の内容であった。制度から漏れた人々が自助・共助でいきいきと過ごしている姿からは、人間の強さとコミュニティの大切さを思い知らされる。後半の聖書（イエス）から学ぶという章はなかなか斬新だ。イエスが福祉制度にとらわれない独自のセーフティーネットを築き、公助に頼らない生き方を実践していたという、福祉の原点から自助・共助を見出していることは非常に面白い。福祉に精通していない者でも比較的とっつきやすい内容で構成されている本書であるが、第 7 章からはさまざまな研究者の文献からの引用が多用されており、専門的な内容でもあるので、幅広い人々が読み楽しめる内容である。また本書のねらいとして、福祉の新たな方向性を見出すということがあったが、財政難など社会の現状をみつめたうえで、自助・共助により必要なだけのサービス（公助）を勝ち取るべきという考えは非常に現実的であり、賛同できるものであった。